

氏名	川上 理子		
学位の種類	博士(看護学)		
報告番号	甲第 50 号		
学位記番号	看博第 9 号		
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 19 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	高齢者の在宅看取りにおける訪問看護師の倫理的意思決定 Ethical decision-making of home visit nurses providing end-of-life care for the elderly		
論文審査委員	主査 教授	山田 覚	(高知県立大学)
	副査 教授	時長 美希	(高知県立大学)
		教授 森下 利子	(高知県立大学)
		教授 中野 綾美	(高知県立大学)

論文内容の要旨

本研究の目的は、①高齢者の在宅看取りにおける訪問看護師の倫理的意思決定の過程はどのようなものか、②倫理的意思決定に影響する要因は何か、③高齢者の在宅看取りにおける訪問看護師の倫理的意思決定はどのようなものかの 3 点を明らかにし、訪問看護師が家族とともに、悔いの残らない看取りができるような援助モデルを示唆する上での一助とすることであった。研究方法は、自記式質問紙を用いた量的研究であり、対象者は、高齢者の在宅看取りに関わった経験のある訪問看護ステーションに勤務する訪問看護師とした。

平成 26 年 6 月 1 日～7 月 25 日にかけて、175 件の訪問看護ステーションに 1,018 通のアンケート用紙を送付し、141 件の訪問看護ステーションから、719 通の回答を得た。回収率 70.6%であり、有効回答数は 698 通、有効回答率 97.1%であった。

高齢者の在宅看取りにおいて、訪問看護師は『生命維持に関わる医療処置の選択』『優先度への感受性のずれと迷い』という状況で、『状況に関連する主観的・客観的事実の把握』『状況に関わるものを明確にする権限の考慮』『状況の整理による倫理的決定の性質と内容の明確化』『状況が存在する場の社会的意味の探求』の分析を行い、『倫理原則を遵守する』『よい看取りになるようにする』決定を行い、『倫理原則が遵守できたか』『よい看取りになったか』という評価を行っていた。分析にもっとも影響する状況は「療養者の安寧と家族の負担のバランス」であった。『状況に関連する主観的・客観的事実の把握』する分析は『倫理原則を遵守する』決定に影響を及ぼし、『状況が存在する場の社会的意味の探求』の分析は『よい看取りになるようにする』決定に影響していた。

分析では、『状況に関連する主観的・客観的事実の把握』『状況の整理による倫理的決定の性質と内容の明確化』といった分析はよく出来ていたが、『状況に関わるものを明確にする権限の考慮』『状況が存在する場の社会的意味の探求』といった倫理的な判断基準となるものに関する分析は十分とはいえなかった。

この倫理的意思決定に影響する要因として、「訪問看護経験」や「在宅看取り頻度」という訪問看護師の経験があげられた。家族の要因は、「家族の介護負担」「家族の意欲」であった。訪問看護師は高齢者の在宅看取りにおける倫理的意思決定では、家族の要因を、療養者の要因よりも影響すると捉えていた。

審査結果の要旨

本学位論文は、高齢者の在宅看取りにおける訪問看護師の倫理的意思決定の過程はどのようなものか、倫理的意思決定に影響する要因は何か、そして高齢者の在宅看取りにおける訪問看護師の倫理的意思決定はどのようなものかの3点を明らかにし、訪問看護師が家族とともに、悔いの残らない看取りができるような援助モデルを作成するための基礎研究である。

本研究によって、訪問看護師の現状分析から、高齢者の在宅看取りにおける倫理的意思決定のプロセスにおいて抱えている困難さを明らかにすることができる。また、訪問看護師の課題の明確化から、在宅看取りにおける訪問看護師の倫理的意思決定が必要な状況に対する感受性、分析力、決定の不十分な部分、および影響要因を明らかにすることができる。そして、課題の解決方法の提案から、教育プログラムの提案が可能であり、研究の意義が十分にあると考えられる。

本研究では、在宅看取りにおける訪問看護師の倫理的意思決定を、在宅看取りで訪問看護師が出会う【倫理的価値の対立や不確かな状況】を認識し、状況についての【分析】によって、倫理原則等に基づいて【決定】し、決定したことを【評価】する、という一連のプロセスと捉えている。本研究は、自記式質問紙を用いた量的研究で、高齢者の在宅看取りに関わった経験のある訪問看護ステーションに勤務する訪問看護師を対象としており、研究目的に対応している。全国の175件の訪問看護ステーションに1,018通のアンケート用紙を送付し、141件の訪問看護ステーションから719通の回答を得、回収率70.6%、有効回答数は698通、有効回答率は97.1%であり、組織責任者などが回答を促す様なバイアスの無い、妥当な回収率および有効回答率と言える。

高齢者の在宅看取りにおいて、訪問看護師は『生命維持に関わる医療処置の選択』、『優先度への感受性のずれと迷い』という【状況】で、『状況に関連する主観的・客観的事実の把握』、『状況に関わるものを明確にする権限の考慮』、『状況の整理による倫理的決定の性質と内容の明確化』、『状況が存在する場の社会的意味の探求』の【分析】を行い、そして『倫理原則を遵守する』、『よい看取りになるようにする』【決定】を行い、『倫理原則が遵守できたか』、『よい看取りになったか』とい【評価】を行っていることを明らかにしている。【分析】に最も影響する【状況】は「療養者の安寧と家族の負担のバランス」であり、『状況に関連する主観的・客観的事実の把握』する【分析】は『倫理原則を遵守する』【決定】に影響を及ぼし、『状況が存在する場の社会的意味の探求』の【分析】は、『よい看取りになるようにする』【決定】に影響することを明らかにしている。また、【分析】では、『状況に関連する主観的・客観的事実の把握』、『状況の整理による倫理的決定の性質と内容の明確化』といった内容はよくできていたが、『状況に関わるものを明確にする権限の考慮』、『状況が存在する場の社会的意味の探求』といった倫理的な判断基準となるものに関する【分析】は、十分とはいえないことも指摘している。この倫理的意思決定に影響する要因として、「訪問看護経験」や「在宅看取り頻度」という訪問看護師の経験を挙げており、家族の要因は、「家族の介護負担」、「家族の意欲」であること、そして訪問看護師は高齢者の在宅看取りにおける倫理的意思決定では、家族の要因を、療養者の要因よりも影響すると捉えていることを明らかにしており、本研究の目的を満たしている。

以上のことから、本学位申請論文は、学位授与に値する成果と考えられ、審査委員は学位申請者川上理子が、博士(看護学)の学位を授与される資格があるものと認める。